

●世界中で近代的な価値がゆらぎはじめ、各地で騒乱が頻発した1968年は、20世紀の転換点ともいえるべき激動の年でした。日本でも、全共闘運動やベトナム反戦運動などで社会が騒然とするなか、カウンターカルチャーやアンゲラのような過激でエキセントリックな動向が隆盛を極めました。近年、この時期に起こった文化現象が様々な分野で注目を集めており、「1968」は国内外で文化史のキーワードとして定着したと言えるでしょう。

●1968年前後は、日本の現代美術にとっても重要な時期になりました。多くの芸術家が日本万国博覧会(大阪万博)の準備に協力する一方で、万博に参加しなかった作家や評論家の多くが、この動きを批判しました。また現代美術のみならず、演劇・舞踏・映画・建築・デザイン・漫画などの周辺領域の作家たちも、既存のスタイルを打ち破るような先鋭的な試みを次々とおこなひ、ジャンルを越えて協力し合ったのです。

1968年 激動の時代の

●さらにこの年には、「もの派」の嚆矢ともいえるべき関根伸夫の《位相—Art in the Unbuilt Age》が発表され写真同人誌『プロヴォーク』も創刊されるなど、新たな世代が一気に台頭しました。学生運動やヒッピームーヴメントに代表されるような、既成の価値や体制に異議申し立てをおこなう時代の空気は、芸術家のあいだでも共有されていたのです。

●本展は、1968年からちょうど半世紀が経過した2018年の視点から、この興味深い時代の芸術状況を、現代美術を中心に回顧しようとする試みです。この時代の芸術を輪切りにして展観することで、新たに見えてくるものがあるのではないのでしょうか。

磯崎新、赤瀬川原平、高松次郎、0次元、横尾忠則、宇野重吉良、寺山修司、唐十郎、シュウゾウ・アツチ・ガリバー、土方巽、林静一、森山大道、関根伸夫ら個性的な顔ぶれが縦横無尽に活躍した時代の熱い雰囲気を感じ取っていただければと思います。



A-2



A-1

最初のセクションでは、美術作品や資料を通して、この時代の熱い雰囲気の一部をお見せします。日大闘争や三里塚闘争にカメラを向けた北井一夫や東大闘争に身を投じた渡辺眸などのドキュメンタリー写真家のプリントや、赤瀬川原平の漫画原画や木村常久のフォト・コラージュなど時代の息吹が感じ取れる作品を通して、この年の動きを追います。またサブセクション「美術界の1968」では、美術家共闘会議のアジビラやポスターも展示します。

1968年 激動の



A-4

A-1. 美術家共闘会議《美術家への提唱》1969年 | 堀浩哉蔵
A-2. 羽永光利《新宿西口フォークゲリラ》1969年 | 羽永太郎蔵
A-3. 鶴岡政男《ライフルマン》1968年 | 広島県立美術館蔵
A-4. 姿婆留闘社《獄送徹画通信(四)》1970年 | 千葉市美術館蔵



A-3



B-1



B-2

この時期の現代美術は、千円札裁判や日本万国博覧会を通して、国家と直接対峙しました。万博を前にして、環境芸術やインターネットメディアが隆盛を迎えた1968年ころの熱気を、磯崎新、山口勝弘、吉村益信らの作品を通して紹介します。彼らの万博参加を真向から批判した0次元、秋山祐徳太子ら「万博破壊共闘派」の活動や、「もの派」誕生の契機となった「トリックス・アンド・ヴィジョン」展、千円札裁判とともに闘った針生一郎と赤瀬川原平らの論争を引き起こした「反戦と解放展」のコーナーもあります。

1968年の 現代美術

B-1. 山下菊二《海を渡る捕虜》1968年 | 豊橋市美術博物館蔵
B-2. 山口勝弘《Sign Pole》1968年 | 高松市美術館蔵

1968年には、いわゆる「アンダーグラウンド(アングラ)」と呼ばれた演劇、実験映画と舞踏が隆盛を迎えました。演劇では寺山修司の「天井桟敷」、唐十郎の「劇団状況劇場」、舞踏では土方巽の《肉体の叛乱》を、写真とポスターを通して紹介します。またイラストレーションや漫画の分野では、横尾忠則、栗津潔、宇野重吉良、つげ義春、林静一ら本職の作家たちの活躍はもちろんのこと、赤瀬川原平、中村宏、タイガー立石ら現代美術家たちも、本格的にこの分野に進出しました。またこの時期にブームを巻き起こしたサイケデリック・ムーヴメントの一端を、田名網敬一のグラフィック作品やディスコのライトショーなどを通して紹介します。

越える領域を 芸術



C-1



C-2



C-3



C-4

C-1. 横尾忠則《新宿泥棒日記》1968年 | 高松市美術館蔵 | ©横尾忠則
C-2. 田名網敬一《ジェファーンソン・エアブレインヒッピーの主張》(レコードジャケット)1968年 | NANZUKA蔵
C-3. 赤瀬川原平《櫻画報》第23号/花嵐—1)1971年 | 個人蔵 | ©1971 Akasegawa Genpei
C-4. 中谷忠雄《土方巽:「肉体の叛乱」より》1968年 | NPO法人舞踏創造資源

1968年、関根伸夫が《位相—大地》を発表したことをきっかけに、「もの派」が登場します。李禹煥や菅木志雄たちは、石や木などの素材をそのまま作品とすることで、現代美術に新しい世界を拓きました。この年には、写真同人誌『プロヴォーク』が創刊され、森山大道、中平卓馬らの若手写真家が、いわゆる「アレ・ブレ・ボケ」と評される新しい写真表現を示しました。またこのころ、松澤淳、高松次郎らにより、70年代に隆盛を迎える概念芸術の先駆的作品も生み出されました。

新世代の 台頭の



D-1



D-2

D-1. 関根伸夫《位相—大地》1968/86年 | 静岡県立美術館蔵
D-2. 菅木志雄《斜位相》1969年 | 小山登美夫ギャラリー協力